

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00268

研究課題名（和文）『日本書紀』古訓との比較による『源氏物語』複合動詞の造語法と表現性の実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study of the Coining and Expression of Compound Verbs in "The Tale of Genji" through Comparison with the Ancient Japanese Kun in "Nihon Shoki"

研究代表者

本廣 陽子（MOTOHIRO, YOKO）

上智大学・文学部・教授

研究者番号：40608931

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は主に次の三点の成果を得た。第一に、『源氏物語』の複合動詞の全用例をデータ化し、使用状況の全容を把握できるようにした。第二に、『日本書紀』の動詞性複音節語において、正格漢文とは異なる用法が存在することを指摘した。また、上代文献における漢語の受容と和語との交渉による変容の一端を見た。第三に、『源氏物語』の複合動詞において、漢語の影響を受けるものがある一方、独自の表現性を獲得しているものを指摘し、その様相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『日本書紀』をはじめとする上代の漢語漢文と、『源氏物語』の和文を、複合動詞に着目して比較、研究することにより、漢語漢文における和語的要素と、『源氏物語』の中に見られる漢語要素の双方を個々の事例に従って検討することで、その近似性の輪郭を掴むことができた。また、『源氏物語』において複合動詞が独自に発展した過程とその表現上の効果を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This study achieved the following three main results. First, we compiled data on all examples of compound verbs in "The Tale of Genji" so that we could grasp the overall usage. Second, it was pointed out that there are different usages of compound verbs in "Nihon shoki" from those in the regular Chinese text. In addition, we clarified some of the acceptance of Chinese words and the transformation of Japanese words in the literature of the ancient period. Third, in the compound verbs of "The Tale of Genji", we pointed out not only the words that were influenced by the Chinese language but also those that acquired their own expressiveness, and clarified their aspects.

研究分野：日本文学

キーワード：源氏物語 日本書紀 複合動詞 訓読語 文章表現

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

物語文学史上、卓越した文学的達成を遂げた『源氏物語』は、内容や物語の方法のみならず、表現性の高さが評価されてきた。中でも、『源氏物語』は、当時一般に使われていた語を複数組み合わせることによって、それ以前の作品には見られない新しい語が多く用いられている。例えば、「そらおそろし」「なま憎し」といった、接頭語を付けることによって既存の言葉に新たなニュアンスを付け加えた派生語や、「そそめきありく」といった二語重ねた複合語などである。この新しい語の使用は、『源氏物語』の表現の大きな特色であり、『源氏物語』作者はこれらの語を巧みに用いることによって、源氏以前の作品では表現し得なかった繊細で豊かな世界を創出してきたと言ってよい。

本研究で着目するのは、それらの新しい言葉の一角を担っている複合動詞である。『源氏物語』には、「あがめかしづく」「あくがれまどふ」のような、二項とも実質概念を表す動詞を新しく組み合わせた複合動詞が多く見られるのである。

この新しい動詞の組み合わせ方(新しく複合動詞を造語する方法)を、作者は何から学んだのか。それについては、かつて秋山虔氏が、竹内美智子氏の説を引きながら、『源氏物語』作者が『日本書紀』から複合動詞の造語法を学んだ可能性を示唆した(「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ」『日本文学(東京女子大学)』62号、1984年)とはいえ、これについては具体的な調査や考察がその後行われないうままになってしまっていた。しかし、近年、国語学研究の方面から、和文に見られる複合動詞が、漢文の訓読語に由来することを指摘する論文が発表されている。百留康晴氏の「日本語複合動詞の発生史について」(『国語学研究』59号、2020年)や藤井俊博氏「『源氏物語』の翻読語と文体 連文による複合動詞を通して」(『同志社国文学』91号、2019年)である。このような国語学方面の成果を踏まえ、本研究では、『源氏物語』を専門とする研究代表者と、上代文学を専門とする3人の研究分担者とともに、『日本書紀』を中心とした上代文献に着目し、そこに見られる語と『源氏物語』の複合動詞の比較を通して、『源氏物語』に新しく見られる複合動詞の造語法の由来と、その表現性を考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、『源氏物語』に見られる特有の複合動詞と『日本書紀』の動詞性複音節語、並びに上代文献の訓読語を比較検討することにより、『源氏物語』作者の複合動詞の造語法の由来の一端を探るとともに、『源氏物語』における、この新しい複合動詞の使用によってもたらされた表現上の効果と、作品内で果たす役割を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 用例調査

まず、中古文学を担当する研究代表者及び大学院生の研究協力者と、上代文学を担当する研究分担者の二手に別れ、それぞれ、『源氏物語』および『源氏物語』以前の中古文学作品における複合動詞と、上代文献における動詞性複音節語や連続動詞の用例調査を行う。

(2) 上代文学・中古文学両分野における用例の考察

調査結果に基づき、研究代表者・研究分担者各自がそれぞれの作品内部での複合動詞・動詞性複音節語を考察し、その特色を明らかにする。

(3) 研究会の実施

各自の考察結果を発表し、『源氏物語』と上代文献の相互の関係について討論する研究会を、毎年、年に4～5回実施する。研究成果はシンポジウム、研究発表、論文にて公開する。

4. 研究成果

本研究の主要な成果として次の3点があげられる。第1に、『源氏物語』の複合動詞用例データの作成、第2に、『日本書紀』に見られる動詞性複音節語を中心とした上代分野における研究成果、第3に、『源氏物語』における複合動詞の研究成果である。

(1) 『源氏物語』の複合動詞用例データの作成

『源氏物語』に見られる複合動詞の全用例を調査し Excel でデータ化した。『源氏物語』において、動詞の組み合わせによって生まれた新しい表現を広く抽出するため、『源氏物語語彙用例総索引』(勉誠社)で一語と認定されているものに加え、動詞が二語連続し、なおかつ意味の上でつながりがあるものも採取した。『新編日本古典文学全集』のページ数と行数を示すことで複合動詞を出現順に並べられるようにするとともに、『源氏物語』以前に用例のある語がどうかも示した。

これらのデータから、『源氏物語』の複合動詞にどのようなものがあるのか、作品内で集中して用いられるところはどこなのか、『源氏物語』初出の複合動詞はどのようなものがあるのか

どが明らかになった。今後、これに更なる分析を加えて公開することを目指している。

(2) 上代分野における研究成果

本研究の上代分野における主な成果として、以下の4本の論考があげられる。

葛西太一「日本書紀神代巻に見える三字動詞 二酸化・双音節化・連続動詞」(『上代文学』130号、2023年)では、『日本書紀』の神代巻において三字を超えて動詞を連ねる例が見られることに着目し、口語的表現の影響や漢訳仏典の影響の可能性を指摘し、それが漢語漢文の本来の語法に由来するものではないことを明らかにした。三字動詞に着目した研究はさらに歴代巻についても進められ、葛西太一「日本書紀歴代巻に見える三字動詞 その成り立ちと偏在をめぐって」(『萬葉集研究』43集、2024年)では、歴代巻にも正格漢文からは外れた語法の三字動詞が認められること、特に三字がそれぞれ異なる意味を表す動詞は、『日本書紀』群を特徴付ける語法として認められることを論じた。

葛西の論考は、漢語漢文においては、同じような意味の語を二つ重ねる二字動詞が一般である中、『日本書紀』の中に三字動詞や異義語を重ねたものという本来の漢文のあり方とは異なった表現が見られるという指摘であり、日本語の口語的表現との関連の可能性も考え得るという点において、複合動詞における漢語と和語の関係を考える上で示唆的である。

宮川優「上代文献における「相」字の受容と変容」(『日本文学研究ジャーナル』24号、2022年)も、漢語と和語の交渉に焦点を当てた論考である。上代文献における「相」字について調査・検討し、本来「あふ」の意味を持たなかった「相」に「あふ」の字訓が加わった背景に、「相」の虚字用法が受容され「あひ」と訓読されるようになって定着し、国語の接頭語「あひ」が「相」で表されるようになった経緯を推定した。

瀬間正之「欽明紀の編述」(『上代文学』127号、2021年)は、『日本書紀』の欽明紀の文字表現に着目し、『日本書紀』の編述の実態の一端を明らかにしたものである。編述者が用いた資料に百済三書以外の半島系資料があること、また、欽明紀の編述者には、仏典に親しんではいたものの漢文の読解・述作能力にやや難のある編述者と、三韓及び倭国の習俗に疎い編述者の二者以上が存在したことを指摘した。

(3) 『源氏物語』における研究成果

本研究の『源氏物語』における主な成果として、以下のシンポジウムと3本の論考があげられる。

2023年度上智大学国文学会夏季大会(2023年7月1日開催)において、「源氏物語の表現の達成」と題してシンポジウムを行った。『源氏物語』と漢詩文を専門とする藤原克己氏と、仏教研究者の立場から古典文学研究も行う石井公成氏を招き、研究代表者を含めた3人がパネリストになって、複合動詞・仏典・漢籍の三つの観点から『源氏物語』の言葉や表現の分析を試みた。後半の討議においては、『源氏物語』の複合動詞にまつわる問題や漢語との関係などについて議論した。

本廣陽子「複合動詞から見た源氏物語の表現」(『上智大学国文学論集』57号、2024年)では、『源氏物語』に見られる実質動詞を二つ重ねた複合動詞の中から、人物の性質・外見や境遇についての表現を取り上げ考察した。人物を形容する場合、形容詞・形容動詞を用いるのが一般的であり、しばしば複数の形容詞・形容動詞が重ねて用いられる。それを複合動詞で表すのは特殊な例であると言えるが、これらの語の多くは『源氏物語』で初めて見られ、『源氏物語』の中で発展した表現の一つであると考えられる。『源氏物語』における人物を形容する複合動詞は、二項とも類義語か類義語でなくても隣接する領域の内容の動詞を重ね合わせて表現する。それらは多面性を表すことよりも、表現しようとする性質や状況をより限定して表そうとすることに重点が置かれている。『源氏物語』に見られる二つの実質動詞を重ねた複合動詞は、以前から同義的結合の二字漢語動詞との関係が指摘されてきた。これらの人物を形容する語も一部には漢語から取り入れた可能性が考えられるものもある。しかし、『源氏物語』においては、類義であるがゆえにそこに生じる意味のずれを含み込むことにより、新たなイメージを加えたり、一語単独では描けない世界を描き出す。これらは『源氏物語』の新しい文章表現の一角を担うものであることを明らかにした。

『源氏物語』の複合動詞の表現性を明らかにしたものとして、次の二つの論考を発表した。

本廣陽子「源氏物語複合動詞小考 空間を作り出す「あふ」」(『上智大学国文学科紀要』39号、2022年)では、「光りあふ」のような非生物を動作主体とする複合動詞「あふ」を取り上げた。「あふ」は、複数の景物を一体化させながら、そこに、視覚、聴覚、嗅覚などによって把握された文学的空間を現出させるという効果を発揮し、『源氏物語』の情景描写を特徴付ける語として機能する。また、直前の描写を統合し新たに規定し直す語として作用する場合や、わずか一語で状況を描き出す新しい表現としても用いられる。これらを『源氏物語』の文章を特徴付ける重要な表現の一つに位置づけた。この論に続いて、本廣陽子「源氏物語の複合動詞小考(二) 「わたる」の発展」(『上智大学国文学科紀要』40号、2023年)では、『源氏物語』の中でも「霞みわたる」のような後項に「わたる」を持つ複合動詞に着目した。『源氏物語』において、空間的叙述を表す語として多くの新しい語が生み出されたことを指摘し、それによって新しい空間を顕現させている様相を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 本廣陽子	4. 巻 57
2. 論文標題 複合動詞から観た源氏物語の表現	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 上智大学国文学論集	6. 最初と最後の頁 19-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 葛西太一	4. 巻 130
2. 論文標題 日本書紀神代巻に見える三字動詞 二文字・双音節化・連続動詞	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 上代文学	6. 最初と最後の頁 16-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 葛西太一	4. 巻 43
2. 論文標題 日本書紀歴史代巻に見える三字動詞 その成り立ちと偏在をめぐって	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 萬葉集研究	6. 最初と最後の頁 171-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 本廣陽子	4. 巻 40
2. 論文標題 源氏物語の複合動詞小考（二） 「わたる」の発展	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 上智大学国文学科紀要	6. 最初と最後の頁 27-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 瀬間正之・石重彦・王沁臻	4. 巻 40
2. 論文標題 朱慶之著『佛典與中古漢語詞彙研究』掲出語索引及び抄訳	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 上智大学国文学科紀要	6. 最初と最後の頁 172-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 葛西太一	4. 巻 24
2. 論文標題 自時以来と自是以来 豊後国風土記の文字運用の一端	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮川優	4. 巻 24
2. 論文標題 上代文献における「相」字の受容と変容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 葛西太一	4. 巻 99-11
2. 論文標題 日本書紀 群における「皇」字の意義 神武紀「皇祖天神」の解釈に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 94-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本廣陽子	4. 巻 39
2. 論文標題 源氏物語の複合動詞小考 空間を作り出す「あふ」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 上智大学国文学科紀要	6. 最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 瀬間正之	4. 巻 127
2. 論文標題 欽明紀の編述	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 上代文学	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮川優	4. 巻 39
2. 論文標題 出雲国風土記における山川原野の描写に見られる意識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 上智大学国文学科紀要	6. 最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 本廣陽子
2. 発表標題 複合動詞から観た源氏物語の表現/シンポジウム「源氏物語の表現の達成」
3. 学会等名 上智大学国文学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 本廣陽子
2. 発表標題 『源氏物語』の複合動詞
3. 学会等名 上智大学国文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 葛西太一
2. 発表標題 日本書紀神代巻に見える二字動詞の成り立ち 二文字化・双音節化・連続動詞
3. 学会等名 上代文学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	瀬間 正之 (SEMA MASAYUKI) (00187866)	上智大学・文学部・教授 (32621)	
研究分担者	葛西 太一 (KASAI TAICHI) (20869200)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	宮川 優 (MIYAKAWA YUU) (20880941)	上智大学・基盤教育センター・助教 (32621)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤田 亜美 (FUJITA AMI)		
研究協力者	大友 あかり (OTOMO AKARI)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関